

書評：今井邦彦・西山佑司著『ことばの意味とはなんだろう』
東京：岩波書店. 2012. xv + 307pp.

(Book Review: Kunihiko Imai & Yuji Nishiyama 'Kotoba no imi to wa nandaroo')

岩崎 永一 (Eiichi Iwasaki)

キーワード：意味論, 語用論, 曖昧性, 変項名詞句, 指示性

1. はじめに

本書は日本を代表する言語学者二人による意味論と語用論の大作である。西山（2003）の流れを発展的に受けたとも言える本書は、西山（2003）のように言語学者を主な読者対象としたものとは対照的に、より広く一般読者に意味論と語用論を紹介する入門的なテキストの体裁を取っている。

確かに、入門的な解説も多々あり、意味論と語用論をこれから学ぶ一般読者や大学院生にも効果的ではある。しかし、本書は入門的テキストが達成するよりも遥かに大きな役割を果たしていると評者は考える。それは、「まえがき」でも述べられているように、真理条件的意味論ないしは指示的意味論 (Referential Semantics) に対して別の新しい意味論、そして、それに並行する語用論を提案しているからである。¹それは西山（2003）の流れを受け継ぐものであり、本書はいわば数十年に渡る西山意味理論の集大成を広く一般読者に示した大作と言える。

そして、本書で展開される西山意味理論は、Chomsky (1995; 2013) が断定するような（自然）言語が統語論と語用論からなり、そこに（指示に基づく）意味論が含まれていないという強い主張に対する、明確なアンチテーゼを示している。^{2,3}すなわち、本書を通じて今井・西山は意味論が語用論からどのように独立であるかを明示しているのである。

要するに、以上の2点、すなわち、真理条件的意味論（指示的意味論）に代わる意味論を提案している点、そして、Chomsky (1995; 2013) の意味論観への明確なアンチテーゼを示している点で本書は画期的かつ非常に影響力の大きな大作と言える。

第1-3章が今井の執筆、第4-6章が西山の執筆である。「まえがき」にあるように、後者では前者のほぼ倍の紙面を使い、この2点を明確に達成していると言える。その点では本書は最初の3章で今井が意味論と語用論に関して一般的な基礎知識を分かり易く論説し、それを受けて、西山が西山意味理論とそれにかかわる語用論を大胆、かつ、明示的で精密に議論を展開していると言えよう。読者には西山（2003）や西山（2013）の興味のある箇所を読み、その後には本書を読むということを勧める。あるいは、その逆に本書を入門書として読み、その後には西山（2003）や西山（2013）の興味のある章を読むという方法も

有効かもしれない。特に西山はコピュラ文やそこに潜む「変項名詞句」の研究の先駆者であり、本書は西山の一連の研究への扉となることだろう。

本書の第1-3章は意味論・語用論の基本概念についての懇切丁寧な解説であり、本書を他書と理論的に明確に峻別するのは第4-6章である。そこで、本稿では、紙数の制約上、第4-6章の議論に力点を置いて論じることとする。

2. 本書各章の論点

第1章では意味論と語用論への入門が論述されている。「文の意味とは、文の真理条件(truth-condition)である」(p.3)とする見解は「真理条件的意味論」と呼ばれるが、著者は、文の真理条件は文の意味だけでは決定できず、むしろ具体的なコンテキストの中で「発話の意図」までも考慮した語用論に依拠する必要があることを強調し、その点で、「真理条件的意味論」を推奨する人々は意味論・語用論の区別にあまり注意を払っていない。」(p.8)と断定している。この点は必要以上に単刀直入である感も拭い去れないが、一つの見方を読者に分かり易く提示しているとも言えるだろう。実際、今までの意味論・語用論では、その領域区分性、そして、そもそもその領域の定義が曖昧であったのは確かである。なお、この点は第6章でも深い議論が展開される。

第2章は「意味はどのように捉えられてきたか」と題して、論理学や哲学の入門的な取り扱いも行っている。グライスの語用論や生成文法の意味論観等を分かり易く解説している。認知言語学やメンタル・スペース理論についても批判的に検討を加えている。ここでは認知言語学を批判するだけでなく、認知言語学の利点についてももっと触れた方が入門書としてより一層公正であり適切であったと思われる。「科学の諸相」と題する節は科学的方法論に触れている。内容は一般的な科学方法論入門であり、もっと手短にしても良かっただろう。あるいはこの部分は、ひょっとしたら、必ずしも必要ではなかったかもしれない。なぜならば、本書の趣旨である「意味とは何か」というテーマからやや離れすぎているからである。もちろん、妥当な意味論とは妥当な科学理論であるから、科学方法論入門は必要だとする反論が予想される。しかし、意味論あるいは言語理論一般を自然科学と見なすか、あるいは、数学や集合論のような非経験科学と見なすかは議論の余地があり、西山を始め「プラトン学派」の言語学者・哲学者が深く議論していることである (cf. Katz & Postal (1991), 西山 (1987; 1998))。 (ただし、本書に関する限り、西山はプラトン学派の主張を強力には顕在化していないことには注意する必要がある。) したがって、第2章では科学方法論入門の節は短縮あるいは省略するか、さもなければ、プラトン学派の議論も含めてこそ、有意義な内容となったと思われる。

第3章は関連性理論の入門的な記述である。関連性理論と西山意味理論はその理論的立脚点において、広義の生成文法理論とけっして矛盾するものではなく、むしろ、生成文法理論を前提とし、さらにそれを補完するものであると言える。既に指摘したように、西山意味理論は生成文法理論で仮定されている統語論の存在を前提にした上で、統語論とは別の意味論レベルが不可欠であること、さらに統語論からも意味論からも独立の語用論レベ

ルが必要であることを明示的に論じている理論体系である。一方、関連性理論は、本書（p.55）で論述されているように、関連性が領域特定性・モジュール性・生得性に依拠した概念である、という立場を取っている。⁴したがって、両理論とも、領域特定性・モジュール性・生得性を強調し、その点で、人間の認知体系をモジュール体系とみなす生成文法理論の基本的立場と整合的であると言える。⁵さらに、「飽和」や「アドホック概念構築」そして「自由補強」といった、ここで導入される術語が後の章での議論で用いられるので、読者はこの章は入念に読む必要がある。「アイロニー」等に関する、関連性理論による論説も極めてウィットに富んだ読みやすく興味深い内容になっていることは特筆すべきであろう。

以上の今井の執筆による基本概念のテキスト・ブック的解説を経て、第4章からは西山の執筆であり、いよいよ本格的に「意味論」とは何か、「語用論」とは何か、Chomsky（1995）の意味論観は妥当であるか、という本書の本来の目的に関わる議論が精密にかつ明示的に展開される。第4章では語や句の「曖昧性」を議論している。「多義」や「不明瞭」についてのテキスト・ブック的解説ももちろん懇切丁寧で分かり易いが、本書の醍醐味はその先にある。P.97で「指定文」（一般には「叙述文」とも呼ばれる）や「倒置指指定文」や「同定文」の術語が紹介され、このあたりから、西山（2003）を引き継ぐ理論的色彩が鮮明となる。⁶

さらに、その後で「パラメータ節」と名詞の関係も議論され、「主名詞」「証拠」と[略]連体修飾節との緊張関係は意味論レベルで捉えられるべき意味論的事実であって、そこに語用論が侵入する余地はない」（p.113）という主張に見られるように、意味論と語用論の明確な領域境界性について明示的な議論がなされる。

第5章では文の曖昧性について西山が議論を展開している。文の曖昧性について統語構造が曖昧である点、指示的名詞句と変項名詞句の違いによる点、指示的不透明による点などを議論している。統語構造が曖昧性をもたらす点について従来までの仮説を分かり易く解説している。強いて言えば、統語構造が意味論的曖昧性をもたらすのみならず、語用論的曖昧性をもたらす点についても触れた方がより良かったと評者は考える。CP（命題句）よりも下の統語位置では統語構造の違いが意味論的曖昧性をもたらすことがあっても、語用論的曖昧性をもたらさないだろう。しかし、CPを分断した領域、いわゆる「カートグラフィアー」（Rizzi 1997等）と呼ばれる研究流派が焦点を当てているCP左辺領域ではフォーカスやトピックのような談話要素が句構造に反映されている。その点で、左辺領域での統語位置の違いが語用論的解釈の曖昧性をもたらす可能性があるため、この関連の議論が含まれていればより良かったと考える。

第5章の中でも「文中の名詞句の機能が曖昧性をもたらす」と題された第4節は本書の中でも最も西山意味論が明確に現れている箇所の一つであると言ってよいだろう。特に「変項名詞句」は西山が一貫して主張してきた理論的概念であり、その有効性はこの節以降も高い説得力を持って示されている。「変項名詞句」は変項を含む名詞句であり、その定義上、指示的にはなり得ない。しかし、西山（2000）で議論されたような、あるメンタ

ル・スペースで指示的になるケースがある。この点に関して、西山（2000）を敷衍させた議論を含めればよりよかったと思われる。変項名詞句については、英語では*the winner*や*the culprit*のように定冠詞が用いられる。（例外はden Dikken（2006）を参照するとよい。）定冠詞が指示性には直結し得ないが、そもそもなぜ英語では一般には不定冠詞の変項名詞句が許容されないかという問題は興味深い点であり、変項名詞句と指示性や定性の問題は大変興味深い論点を残しているように思われる。⁷この点も本書で触れた方がなお良かったと考える。

場所存在文と絶対存在文について、前者が指示名詞句、後者が変項名詞句を持ち、それが意味論上の曖昧性をもたらしており、語用論的曖昧性ではない点も非常に明快で説得力を持って議論されている。さらに、その他の構文について変項名詞句を適用し、特に、変化文をコピュラ文に帰している点は興味深いし、説得力がある。

第5章第7節で展開される「指示的に不透明な解釈」と「指示的に透明な解釈」の差異もすこぶる興味深い。以下、直接引用すると、

- (1) 「[略][信じている][略]のような心的態度を表す述語は、その埋め込み文中に登場する名詞句を、それと同一指示的な他の名詞句で置き換えると全体の真理値が変わる」(p.220)

というものである。これが適応されるのが「指示的に不透明な解釈」の文であるという。西山の説明をコピュラ文の埋め込み文に当てはめれば以下の(2b)のようになる。⁸

- (2) (a) [オイディプス王が結婚した女性]は {イオカステ/オイディプスの母親} だ。
 (b) オイディプス王は [[自分が結婚した女性]は {イオカステ/自分の母親} だ] と信じている。(評者作成の文)

「オイディプスが結婚した女性」は変項名詞句であり、(2a)はコピュラ文（倒置指定文）である。それが心的態度を表す述語の目的語として埋め込まれたのが(2b)である。(2b)で「イオカステ」を「自分の母親」に置き換えると、文全体が不自然になるのは、統語的理由によるものではなく、意味的理由、特に、真理値の変更によるものである。もちろん、(2b)において「自分の母親」ではなく「イオカステ」を置いておけば、文は不自然にはならないだろう。

西山はp.221で、「指示的に透明な解釈」で読んだ場合の当該の名詞句を「指示的名詞句」と呼び、「指示的に不透明な解釈」で読んだ場合の当該の名詞句を「非指示的名詞句」と呼ぶ研究者も「少なくない」と述べている。しかし、「指示的に不透明な解釈」で読んだ場合でも、「世界の中の個体を指示しようとしている点で、やはり指示的な名詞句の一種なのである」と正しく結論付けている。客観的なメンタル・スペースでは自明のことであり、正しいし、オイディプス王のメンタル・スペースでも多分に正しいであろう。西山(2000)

のメンタル・スペースに基づく議論をここでの議論に応用すれば、たとえば

(3) オイディプス王は自分の母親と結婚したがっている。(p.221【下線部は原典】)

において、「オイディプス王」のメンタル・スペースないしは知識スペースでは「自分の母親と結婚したがっている」という命題は「偽」であるが、そこでも「自分の母親」は指示的である。⁹この点でも西山の上記の主張は正しいことが分かる。

総じて、第5章では、文の曖昧性は変項名詞句等の意味論の部門における言語知識に起因しており、語用論に帰せられるべきではないことを結論付けている。言い換えれば、Chomsky (1995) のように指示に基づく意味論 (Referential Semantics) が存在しない立場に対して、変項名詞句の有用性を実際の言語分析を通じて極めて透明性の高い形で非常に高い説得力を持って議論していると言える。

第6章は意味論と認知語用論・関連性理論の関係を論じている。「ウナギ文」については変項名詞句を用いて精緻な分析が提案されている。西山がp.247で強調しているように、認知語用論での解釈が成功するためには、その基礎として意味論レベルでの精緻な論理形式が必要である。西山の議論はこれを「ウナギ文」を例に実際の言語事実の新しい分析方法を提示するという非常に説得力の高い議論であることは特筆に値する。

同様に、叙述名詞句という意味論的性質が自由補強という語用論的性質を阻止するという点について議論を展開している。これはCarston (2002) の「言語的 (意味) 決定不十分性のテーゼ」に対しても「重要な脚注」を付すことになる、と主張している。

最終節の「意味の科学に向けて」では発話の明意や暗意を探求していけば、究極的には「必然的に、「S[Sentence] 自体の言語的意味」というきわめて抽象的な、目に見えない構造を文の背後に仮定するところまで行き着くのである」と結論付けている。¹⁰そして、その「S自体の言語的意味」とはあくまでも経験的仮説であり、その妥当性は、最終的には妥当な意味論・妥当な言語理論の中で決定されるだろう、と結論付けている。

3. 終わりに

本書における西山意味理論を評者なりの言葉で評すれば以下のようなことになる。目の前にある言語事実に対して地に足のついた方法で経験的仮説を立て、その妥当性を抽象的な言語理論の観点から吟味し、また、その経験的仮説が集積され、言語理論となる。さらに特筆すべきは、著者のたぐいまれなる言語直感と鋭敏な観察力により本書が展開されている点である。その点で、言語学をこれから学ぼうとする方々、また、言語学者で意味論を専攻する方々、そして、意味論以外の分野にある方々等の広い層のいずれの方々にとっても学ぶところの多い大作であると考え。本書は下記のような言語学の現状に対して有益なテキスト・ブックとしても機能するものと考え。

音声表記、フィールド方法、その他同種のものにコースがあるのは

きわめて普通であり、そこで学生は物理的事実を増々鋭く観察することを学ぶのである。しかし、意味の事実、精神的事実を観察するように彼らを訓練するようなコースは実際まれである。その結果、データの半分は無視されがちであり、このことは言語学の分野に対して計り知れない損害をもたらす。

(Hirtle 1982; 秋元・訳 1992: 8)

このような現状に対して、「意味の深いレベル」(西山2003: 103)に到達しようとする西山意味理論への導入的テキスト・ブックとして、本書は今後の言語学の発展、ならびに、言語学の教育の発展に大いに資するものであると考える。

-
- 1 Chomsky (2013) も指示に基づく意味論 (Referential Semantics)、ならびに、「指示 (reference)」という概念そのものに対して懐疑的である。なお、「指示」に対する影響力の大きな著作にKripke (1980) がある。
 - 2 Chomskyの意味論に対する発言はしばしば不正確であり、かつ誇張が含まれ、その結果、ミスリーディングであり、彼の発言を受け取る際には注意を要する。例えば、Chomsky (1979: 140) は “Everyone has always taken for granted that a central concern of generative grammar is to incorporate linguistic semantics” と述べている。確かに、ChomskyはChomsky (1957: 12; 1965: 163) で関連の論述をしている。しかし、そのことを持って、生成文法系の言語学者「みんな」がそのように考えていた、ということにはならないだろう。他に、Chomsky (2000: 74) では意味論が統語論の一部である、と述べているが、Chomskyであれ、誰であれ、そのような主張を裏付ける具体的かつ経験的な議論が提示されなければ、先験的主張のみではナンセンスである。(ここで、『言語文化論叢』の査読者は、Chomsky (1977) に言及しつつ、「チョムスキーはそのような主張を裏付ける (と考える) 具体的・経験的議論をいままでに一度も提示したことがないというように読め」る、と指摘しているが、ここで私が述べていることはChomsky (2000) の当該箇所がミスリーディングで問題がある、ということである。) 対して、今井・西山は、統語論とも語用論とも独立の (しかしそれらと関係を持った) 意味論的曖昧性について経験的仮説を提示して議論しており、説得力がある。なお、査読者より、Chomsky (2000: 74) の上記の主張を本文に記載するように、という貴重な指摘があった。査読者の指摘に深く感謝しつつも、本文中での重要な論旨は、Chomskyは (指示に基づく) 意味論が不要である、と述べているということであり、その論点が却って曖昧になるような上述のChomsky (2000: 74) の主張については本脚注に収めることとした。結局、Chomsky (2000: 74) が述べていることも、意味論が統語論の一部に過ぎず、言語が統語論と語用論から成り立っている、ということである。
 - 3 『言語文化論叢』の査読者より「従来の意味論が無用になったのか、あるいは別の部門に統合されたのか」についての説明があれば有益である、とのコメントがあった。西

山意味理論は意味論における一つの意味理論であり、他にも多数の意味理論がある。西山意味理論（あるいは認知言語学あるいは他のいかなる意味理論であれ何であれ）が登場したからと言って、別の意味理論が「無用」になるわけではない。競合する理論同士の理論的優位性は経験的・理論的に（ときとして）競われるべきだが、そうだからと言って、ある理論が登場すると別の理論が「無用」になる、ということではない。また、それぞれ別の枠組みの理論であるから、「統合」されることもない。同様のことはMinimalismやHPSGのような競合する統語理論にも言えるだろう。

- 4 「モジュール性」についての認知言語学の立場については辻（2003：11）が参考になるだろう。辻（ibid.）は統語論の自律性の否定とモジュール性の否定は別である、と論説している。
- 5 関連する論説については、西山（2001：294-295）を参考にすると良いだろう。
- 6 『言語文化論叢』の査読者の要請に従い、以下に措定文、倒置指定文、同定文の例文をそれぞれ列挙する。

- (i) [措定文] 鯨は哺乳動物だ。（西山2003：123）
- (ii) [倒置指定文] 委員長は、あのひとだ。（西山ibid.：141）
- (iii) [同定文] 何でも反対するひとが山田さんだ。（西山ibid.：167）

上記の(i)の「哺乳動物」は叙述名詞句であり、非指示的であり、(ii)の「委員長」は変項名詞句であり、非指示的であり、(iii)の「山田さん」は指示的名詞句であり、「何でも反対するひと」は誰か、という問いに対する答えを提示する（西山 ibid.：168）。以上、すべて西山（ibid.）に負っている。さらに、倒置指定文の変項を埋める値名詞句は常に指示的であるとは限らない（西山2003：138-140）点に注意する必要がある。これらのコンピュータ文に関するさらなる解説については、本書評の範囲を超えているので立ち入らない。詳細は西山（2003）ならびに西山（2013）を参照されたい。

- 7 関連する点は岩崎（2014a, 2014b）で議論した。『言語文化論叢』の査読者からは、この点についての初学者向けに解りやすい解説の要請があったが、岩崎（2014b）との重複を避けるため、また、書評の範囲を超えると考え、ここでは立ち入らない。関心のある読者は岩崎（2014b）を参照されることを強く勧める。書評の目的のひとつは、初学者が書評内容をすべて理解できなくとも、興味をもった場合には、被書評文献や関連文献に直接あたる、というような契機を提供することであると考え。

- 8 ここでの「倒置」の意味については脚注6を参照せよ。「AがB（変項名詞句）だ」が「B（変項名詞句）はAだ」に「倒置」されたと考えればよいだろう。なお、今井・西山（2013：218）のオリジナルなセンテンスは以下の通りである。

- (i) オイディプス王はイオカステと結婚した。
- (ii) オイディプス王は自分の母親と結婚した。

（下線部は原典による。）

- 9 『言語文化論叢』の査読者より、「メンタル・スペースが変われば(3)の命題は「真」になる可能性もあるのだから、ラネカーになじみのない読者のために、一言、言及があっ

たほうがよい」とのコメントを頂戴したが、西山（2000）はLangackerとは全く独立である。本文中でも断ったように、ここで述べていることは、「[「オイディプス王」のメンタル・スペースないしは知識スペース]に関する限りにおいてのみ、偽である、ということである。なお、メンタル・スペースについてはFauconnier（1994）が創始者であり、参照するとよいだろう。

10 この点については西山（2013：IX）も是非、参考にすると良いだろう。理論構築とそのunderlying intuitionについて、非常に興味深い、そして、西山の一貫した研究姿勢が伺えるコメントが述べられている。

謝辞

本書評に対して『言語文化論叢』の2名の査読者の先生方より有益なコメントを頂戴した。査読者の先生方と紀要委員長の田端敏幸先生に厚く御礼申し上げる。ただし、本稿の責任はすべて執筆者にある。

引用文献

- Carston, Robyn. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. [ロビン・カーストン著, 内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子訳. 2008. 『思考と発話—明示的伝達の語用論』東京：研究社.]
- Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1977. *Essays on Form and Interpretation*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Chomsky, Noam. 1979. *Language and Responsibility: based on conversations with Mitsou Ronat*. NY: Pantheon Books.
- Chomsky, Noam. 1995. Language and Nature. *Mind* 104 (413): 1-61.
- Chomsky, Noam. 2000. *The Architecture of Language* (Mukherji N, Patnaik BN, Agnihotri RK, eds.). New Delhi: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam. 2013. Notes on Denotation and Denoting. Ivano Caponigro, Carlo Cecchetto (eds.) *From Grammar to Meaning: The Spontaneous Logicality of Language*, Cambridge: Cambridge University Press. pp.38-46.
- Den Dikken, Marcel. 2006. *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Fauconnier, Gilles. 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hirtle, Walter H. 1982. *Number and Inner Space: A Study of Grammatical Number in English*. Quebec: Les Presses de L'Université Laval. [ウォルター・H. ハートル著, 秋元実治訳. 1992. 『数詞と内部空間：ギョーム理論から』東京：勁草書房].

- 岩崎永一. 2014a. 'The Morning Star is the Evening Star' (「明けの明星は宵の明星だ」)
構文の意味論的・語用論的・言語哲学的分析：同一性文／等価文分析への懐疑と（倒置）指定文分析ならびに非指示的な定冠詞THEの意味論的分析の提案. 日本第二言語習得学会夏季セミナー. 於・中央大学野尻湖セミナーハウス. 2014年9月2日.
- 岩崎永一. 2014b. 「非指示的な定冠詞の意味論的分析と英和辞書の記述への示唆—変項の個数と日本語の「は」との対比を巡って—」『国士館大学教養論集』76：27-57.
- Katz, Jerrold & Paul Postal. 1991. Realism vs. Conceptualism in Linguistics. *Linguistics and Philosophy* 14: 515-554.
- Kripke, Saul. 1980. *Naming and Necessity*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
[ソール・クリプキ著八木沢敬、野家啓一訳. 1985. 『名指しと必然性—様相の形而上学と心身問題—』東京：産業図書.]
- 西山佑司. 1987. 「E-言語からI-言語への移行をめぐる」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第19号, 105-132.
- 西山佑司. 1998. 「言語と生成文法にたいする解釈をめぐる—心理主義 対 言語実在主義—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第30号, 169-199.
- 西山佑司. 2000. 「二つのタイプの指定文」. 山田進, 菊地康人, 粉山洋介 (編), 『日本語意味と文法の風景：国広哲弥教授古稀記念論文集』, 東京：ひつじ書房, pp.31-46.
- 西山佑司. 2001. 「関連性理論」. 辻幸夫編『ことばの認知科学事典』東京：大修館書店, pp. 294-303.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論』東京：ひつじ書房.
- 西山佑司 (編著). 2013. 『名詞句の世界：その意味と解釈の神秘に迫る』東京：ひつじ書房.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Haegeman Liliane. (ed.) *Elements of Grammar*. Dordrecht: Kluwer, 281-337.
- 辻幸夫. 2003. 『認知言語学への招待』東京：大修館書店.